日タイの文学作品にみる山田長政――『王国への道』と『オークヤー』との比較研究

コースィット・ティップティエンポン[1]

1. はじめに

日タイ関係の歴史を語る際、具体例の一つとして頻繁に挙げられるのが、十七世紀のシャム（タイ）に渡航した山田長政（以下、長政と表記する）のことである。現在のタイでは、その名が当時の官位制度である三位・欽賜名の「オークヤー・セーナーピムック」で知られている。タイの旧官位制度は、「バンダーサック」と呼ばれ、基本的に九位まであった。絶対君主制で国王がバンダーサックを決め、配下の者に与える。序列の高い順に、「ソムデット・チャオプラヤー」、「チャオプラヤー」、「プラヤー」あいるは「オークヤー」[2]、「プラ」及び「チャムーン」、「ルアン」、「クン」、「ムーン」、「パン」、「ナーイ」になる。最上位のソムデット・チャオプラヤーは、タイの歴史においてアユッタヤー時代にはまだ存在せず、トンブリー時代（一七六七―一七八二）に初めて定められ、一九四〇年代に廃止されるまで四人しか与えられなかった。山田長政は三位のオークヤーのバンダーサックまで与えられたという事実は極めて国王から信頼されていた証しである。

長政についての記述は、日本とタイ双方共に、歴史に関する書籍に記載されている。日本では、例えば教科書の『新日本史：日本史B』や参考書の『学習図鑑日本の歴史』、『詳説日本史図録』などにあり、タイでは、在日タイ王国大使館が日タイ修好百二十周年を記念して二〇〇七年に発行したブックレットやチャーンウィット・カセートシリ氏が執筆した『アユタヤ』[3]（アユッタヤー）がある。この歴史上の人物は日本からシャムまで渡り、傭兵として活躍し、オークヤーの位まで出世したと言われているが、実際のところ正確に確認できる詳細な歴史資料は乏しい。日本では、『暹羅国風土軍記』や『暹羅国山田氏興亡記』や『天竺徳兵衛物語』など[4]のような江戸時代の文献の中に記述が残されているのに対し、タイではタイ語そのものによって記録されたものがなかった。タイで長政の存在について最も引用されているのが、『チョットマーイヘート・ワン・ワリット』（ワンワリット公文書）であるが、その記述は簡略なもので、彼の出身や経歴などは書かれていない。長政の存在と役割を示す内容は、アユッタヤーでのある政治的な出来事に過ぎない[5]。公文書とされているこの資料も、当時アユッタヤーと貿易のあったオランダ人のエレミアス・ファン・フリート（Jeremais van Vliet）が、一六三六年―一六四〇年の間オランダ語で執筆し[Baker et al.:vii]、後にフランス語、英語、タイ語の順に訳されたもので、そもそもタイ語で記述されたものではなかったのであ

る。さらに、二〇〇三年にタイ人の元新聞記者がタイ語で長政の歴史を書きつづった書籍を出版したが、多くは日本での生活あるいは推測の域を出ない内容であり、新たな知見や新発見の一次資料に基づくものはなかった。長政のそういった曖昧な生い立ちや家柄や活躍を裏付け、相互に確認をできる証拠が限られているにもかかわらず、日タイ両国では彼の存在はよく知られている。特に日本では長年注目され、彼の故郷とされている静岡県でも毎年のように長政まつりが行われている。

関連作品の数からみると、長政への関心は日本では以前からタイより高いことが分かる。彼の人生を描いた一九五九年に公開の映画『山田長政――王者の剣』のみならず、小説も三作以上あり[6]、宝塚歌劇の舞台作品まである[7]。一方、タイでは、二〇一〇年に公開された歴史映画『サームライ・アヨータヤー』（アユッタヤーの侍）のおかげで、それまでにあまり知られていなかった長政の名が新たに脚光を浴びた[8]。しかし、日本に比べると、やはり他の作品数は少ない。日本のような舞台作品はなく、文学作品も僅かであり、それは、『スリヤー・パヨーン』（太陽のプライド）（一九九一）、『オークヤー』（二〇〇六）、そして『チャオ・ライ』（ライ王）（二〇一〇）である。前者の二作は、長政を主役として登場させるが、後者は、長政の関わりがありながらも、大抵アユッタヤー朝のプラーサートトーン国王を中心に物語が展開している。日本では、長政が主人公になる小説の中では、最も注目されるのが遠藤周作の『王国への道――山田長政』[9]（一九八一）と思われる。タイでは、そのような作品はコーンクナーリーの『オークヤー』（二〇〇六）にあたるだろう。

本稿では、日タイ間を背景に、上記に述べた長政が主人公になる二作の『王国への道――山田長政』（以下、『王国への道』）と『オークヤー』を比較しながら、それぞれの作風を分析し、物語に出てくる長政の正体を追究したい。先行研究において、本課題に相違する研究が二つあり、それは土屋了子氏による「山田長政のイメージと日タイ関係」と井上絵里氏による「遠藤周作における歴史小説創作の意味――『王国への道――山田長政』から」である。しかし、いずれにしても比較文学の側面からの分析ではない。前者は歴史研究であり、長政のイメージが実は政治的な、かつ日タイ外交的な理由で日本人の英雄として大げさに推し進められたと主張している。後者は文化・文学研究だが、日本人作家の文学作品を一つ議題に採用し分析したものである。それに対して、本稿はそれらの研究と異なり、カルチュラル・スタディーズの側面からでも考えられる比較文学の研究として、今まで日本で知られていなかったタイの小説を取り上げ、日本の有名な作品も考察し、出身国の違う作家がどのように同じ人物を描出するのか明らかにしたい。構成は次の通りである。第一章の序論の後になる第二章は長政の人生の舞台になるアユッタヤーの歴史を紹介する。第三章は、粗筋と筆者を紹介し、作風を分析する。第四章は、日本人の作家とタイ人の作家はそれぞれの見方によって、異文化の環境における長政の正体をどのように描写するのか分析する。第五章は結びとする。

2. 山田長政が体験したアユッタヤーの時代背景

アユッタヤーは地名でもあり、王朝名でもあった。一三五一年に興るアユッタヤー朝は、一四三八年になると、十三世紀前半に成立したスコータイ朝を併合した。都とされたアユッタヤーには異民族が集まり多様性のある街を築いており、一時期言葉の違う四十もの民族がいた[チャーンウィット:136]。隣国のラオス人やモン人やクメール人などのみならず、遠く離れた国から渡来した人もいた。例えば、ベトナム人、中国人、日本人、オランダ人、ポルトガル人、イギリス人などであった。

一五六九年にアユッタヤーはビルマの属国となったが、一五八四年にナレースワン王子によって再び独立を果たした。その後、一七六七年にビルマとの戦争に敗北し滅亡した。ビルマとの戦いは何度もあったが、一番被害が大きいのがこの一七六七年の戦争であり、この王朝の四百十七年間にわたる歴史が閉じた。しかし、他国との戦いだけでなく、アユッタヤーの四百年以上の経緯を省察すると、王位をめぐる権力闘争が頻繁に起きたことが見てとれる。長政がアユッタヤーに滞在した期間だけで、君主が三回も変わっている。長政の人生に関わるシャム王が少なくとも四人いて、それはソンタム王（在位：一六一〇―一六二八）、チェーッターティラート王（在位：一六二八―一六二九）、アーティッタヤウォン王（在位：一六二九）、そしてプラーサートトーン王（在位：一六二九―一六五六）である。このような状況の中、長政は日本人として新しい社会環境に適応することだけではなく、激しい政治闘争と時代の変遷にも取り組まなければならなかったことが予想される。

アユッタヤーにおいて、長政が一番活躍したソンタム王の時代の十八年間は、比較的に治世が平和で安定し、仏教や文芸や外交など、多くの面で繁栄した時期であった[チャーンウィット:196]。アユッタヤーの第二一代の国王であるソンタム王は[10]、第二十代の国王・エカートッサロット王と妃の間に生まれた子供だが、即位できたのはアユッタヤー王朝において厳密に王位継承者を定める王室典範がなかったからである。さらに王室典範がなかったからこそ、王位を巡る対立が発生しやすかった[11][Dhirawegin:65]。第二十代の国王と王妃の間に生まれた第一王子は反乱を企んでいると責められ、父王が逝去する直前に王命により処刑された[Wyatt:92]。父王が没すると、第二王子のシーサオワパーク王子が王位を引き継いだが、まもなく倒された。それまでに僧侶になっており仏教に造詣が深く弟子や官僚で慕う者が多かったインタラーチャー王子が、ソンタム王として一六一〇年に即位できた[チャーンウィット:195]。

一方、シャムとの国交を図ろうとする徳川家康が、一六〇六年にシャムの国王に書簡を送った。山田長政は一六一〇年代の前半頃、シャムに渡ったと推測されている。ちょうどその時期はソンタム王の時代であり貿易が盛んになり、シャムに渡来しアユッタヤーの地に住みついた外国人が多かった。現地の日本人コミュニティも大きくなり、アユッタヤーと日本の貿易の最盛期には、日本人町の人口は約千―千五百人にも上り[12]、〝日本人義勇隊〟には八百人がいた[チャーンウィット:154, 197]。長政はこの時代に、宮仕えしオークヤーの官位まで与えられた。

ソンタム王の後期には、再び王位継承権の問題が起こり、貴

族がいくつかの派閥に分かれた。有力な派閥は次の国王として、ソンタム王の望みに従い、王の十五歳の長子を支持する、王宮の仕事を取り締まるオークヤー・シーウォーラウォンの派閥と、もう一つはソンタム王の弟・シーシン王子を支持するオークヤー・カラーホームの派閥であった。後者は王の希望に公然と反対していたので、戦争を厭う王は自身の味方をしてくれる者を求め、オークヤー・セーナピムックを説得した[Thawornwatskul:215-216]。そして一六二八年十二月、三十八歳のソンタム王は没した。オークヤー・シーウォン派が圧倒し、亡き王の望み通り、彼の長子であるチェーッタティラート王が即位した。オークヤ・シーウォーラウォンは反対派の影響力を徹底的に排除し、あらゆる手段を使い、自身をオークヤー・カラーホームの位まで昇進させた。暫く経過すると、新オークヤー・カラーホームの策略により、チェーッタティラート王も倒された。次に弟・アーティッタヤウォン王子が即位した。この頃、王位簒奪を狙っていた同オークヤー・カラーホームは、長政の介入を防ぐため、彼に対して陰謀を企てたようである。長政は、反乱が起きているリゴール（現在、タイの南部にあるナコーンシータンマラート県）の地へ赴任させられた。長政が留守のアユッタヤーでは、オークヤー・カラーホームが即位一か月余りのアーティッタヤオウォン王位を崩壊させ、次の国王になり、プラーサートトーン王と名乗った。

長政自身は、一六三〇年にリゴールより南にあるパッターニーの地での戦闘で負傷した後、陰謀により傷口に毒を塗られ暗殺された。長政の死後、日本人町は焼き尽くされ、日本人は追放された。しかし、日本人は事前に壊滅されることを推測しアユッタヤーより避難していた。三年後、プラーサートトーン王は日本人が戻ってきて居住することを認め、一六三七年頃には、日本人は三百～四百人ほど住んでいたが、日本の鎖国政策のため、日本人町の人口は減少の一途をたどった。[チャーンウィット:154]。

3. 『王国への道』と『オークヤー』とその作風

3. 1 遠藤周作の『王国への道』

中編小説の『王国への道』は雑誌「太陽」に一九七九年七月から一九八一年二月まで連載された遠藤周作の作品であり、同年四月に平凡社により単行本として刊行された。周作は幅広く知られている日本人作家の一人であり、代表作は、例えば、『白い人』（一九五五）や『海と毒薬』（一九五八）やアメリカ人のマーティン・スコセッシ監督の近日公開する映画の原作である『沈黙』（一九六六）などがある。連載の終了後、周作は同雑誌の取材に対し、「バンコクをはじて訪れたのはもう十三、四年前になるが、その時から私は山田長政をいつか書きたいと考えていた。」[13][遠藤:1981:151]と述べていた。本人が話すように、周作はタイに行ったことがあり、その後山田長政についての作品を作るにあたって、『王国への道』を発表する前に、まず『メナム河の日本人』（一九七三）という戯曲を書いた。これは芥川比呂氏の演出で劇団「雲」が上演した[遠藤:1981:151]。同取材で、周作は長政について興味を持った理由を三つ挙げた。第

一に、東南アジア各地では、長政も含め日本人は好戦的であると思われていたようだが、長政はしかるべきそのイメージを逆に利用し、異国であるアユッタヤーで生活手段を見つけることができたことである。第二に、陰険な政治と掛け引きが激しいアユッタヤーで「長政のような陽性」の日本人がどう身を処したのかという点である。第三に、キリシタン時代に関心のある周作は、長政がアユッタヤーにいた頃に、ペドロ岐部という名の日本人キリシタンが、一度長政を訪れたことに驚いた点である［遠藤:1981:151-154］。このような理由で長政について書こうと考えたが、特に岐部のことは、大きく『王国への道』執筆に影響を与えている。歴史的に岐部は実在した日本人であり、一六一四年に日本を追放され、マカオ、マラッカ、ゴア、バグダードを経てローマまで辿り着き、三十二歳の時にようやく司祭になれた。

キリスト教がらみの雰囲気を与える「大村から長崎に向かうには――」［遠藤:1984:5］の冒頭が示すように、周作による長政の冒険と出世は長崎から始まる。当時の日本社会を描く「少年たちはいずれも紺色の着物を着ていたが、数人の大人は切支丹の南蛮僧侶がまとう修道服に身につつんで、なかにはあきらかに鼻たかく、碧眼の外人もまじっているのがわかった。」［遠藤:5］の描写が初ページから早速導入される。舞台は慶長一九年（一六一四年）で、江戸幕府のキリスト教禁止令により多くのキリシタンが追放された。その中に、ペドロ岐部（一五八七―一六三九）もいた。一方、作品の前半で藤蔵なる山田長政は「出世」と「富」を求め、日本を出てたまたま岐部とマカオに向かう同じ船に乗り、そこで知り合った。マカオにいる間、アユッタヤーについての噂と、そこにいる日本人は貿易だけでなく、傭兵としても活躍している人もいることを初めて聞いた。長政は、マカオは自分の居場所ではないと感じ、日本人町がすでにあるアユッタヤーへ行くことに決めた。美しいが恐ろしいと言われているアユッタヤーに渡った長政は早く適応でき、現地の日本人と親しくなれた。今の身分以上になりたい彼は、ある時ヨターティップ王女を見かけ、一目ぼれし憧れ、「いつかはあの姫の体を抱いてみたものだ」［遠藤:1984:75］という気持ちまで生まれた。

長政はアユッタヤー王朝のソンタム王のもとで活躍し、日本人にもタイ人にも能力を認められ、日本人の傭兵隊長の位に上がり、オークヤーの地位まで国王に与えられた。しかしソンタム王が逝くと、王位継承権をめぐる闘争が発生し、次の国王になるのは旧王の長子か弟か、二つの派閥に分かれた。それに直面した日本人達も不安になり、どちらの派閥の味方をしたら良いのかということに迷ったため、長政は日本人も二つのグループに分け、それぞれの味方をするように提案し、自分は比較的に力が弱く不利な派閥を支えることにした。結局、長子を支持する派閥が勝利し、その派閥についていた長政はますます政治的権力を増していくが、反対派についた日本人は殺害されそうになっても助けることをしなかった。そのリーダーの一人は、後に長政の隠し妻になる娘を残した。長政は、それ以降摂政と対立し、シャムの南あるリゴールの藩において反乱を平定するように命令され、そこで恨みを持つ隠し妻に毒殺された。

3．2　コーンクナーリーの『オークヤー』

二〇〇六年にタイの文学界において新人で知名度が比較的低い女性作家コーンクナーリーが書き下ろした『オークヤー』が刊行された。この作品は中編小説であり、新人賞の第一回トンマヤンティー文学賞に応募され、入選の二十作品の一つになった。入賞までに至らなかったが、単行本として出版された。タイの中で山田長政を中心とする僅かな文学作品の一つと見なされる。「コーンクナーリー」の名はペンネームであり、本名はカルナー・パーシーポン・斎藤である。一九八四年にタイのチュラーロンコーン大学文学部日本語学科を卒業した。後に日本人と結婚し、長年日本で暮らしているので、日本語や日本の習慣を理解している。処女作の『オークヤー』の後、別のペンネームのソーイサッタバンで短編小説とノンフィクションも発表している。日タイ翻訳にも携わっている。短編小説『プレーンチーウィット2505』（人生の曲2505）（二〇〇七）は第八回ナーイン文学賞の準優勝を果たし、子供向けノンフィクション『コムナー・ティオ』（一生懸命旅行する）（二〇〇八）は第五回ウェンケーオ文学賞を受賞した。『オークヤー』に関して、コーンクナーリーは二〇〇五年六月のある日、オークヤー・セーナピムックについて書くことを思案し、その夜、寝付く前に漠然としたプロットを考え出したようである。そばに寝ている日本人の夫を見て、日本人はタイの人々が政についてどう思うのか知りたがるとほのめかしているように感じたと、自分のブログに書いている（Konkunari: ブログ）。

コーンクナーリーは著作『オークヤー』を、長政の幼い時期から描き出した。内容は次の通りである。九歳の長政は義父と同伴し、染め布を裕福な家族に届けた。様々な場所を回りながら、武士に出会うこともあり、彼らに憧れるようになった。ある日、大富豪の一家を訪れ、その家のお嬢さんである菊に出会い、友人になった。それ以来、菊のことは長政の心に印象深く残った。七年後、十六歳になった長政は菊と再会し、お互い愛し合う関係になる。そのうちに、沼津藩主の大久保忠佐に仕え、駕籠かきの職を得た。常に自身の身分の昇進を望む長政は、関ケ原の戦いの後は、平和な時が続き、長期間戦いが起きないと予想し、このままだといくら努力しても地位の高い優秀な武士になれないことを懸念した。しばらく経つと、菊は長政より身分の高い男の家に嫁ぎ、大久保藩主は亡くなった。長政は失恋と恩のある主君の死により絶望し、二人の友人と共にアユッタヤーへ行くことを決意する。朱印船で長崎から台湾を経てシャムに到着し、日本にはない寺院や川沿いの生活など、故郷と違う風景を見て、新鮮な気持ちが生じた。アユッタヤーでは、長政は現地のタイ人とも親睦を深め、そして新しい恋人にも巡りあう。その女性はシャム人、ワードと名乗った。当初長政は貿易に従事し、シャムと長崎との間を行き来した。後に当時の頭領から傭兵の職に誘われ、昇進を続けオークヤーの位まで上った。アユッタヤーの使節団代表として日本に戻り、江戸で将軍にも面会した。長政はその実力で、ソンタム王から大きな信頼を受け、王の娘と結婚することができた。その後、王位継承をめぐる争いに巻き込まれ、リゴール藩主として任命された。少し離れたパッターニー反乱を抑える際、負傷し、傷口にタイの兵士に騙され毒のある包帯を使用し、暗殺された。

作中のアユッタヤーの過去の話はそこで終わり、設定が変わ

り、二〇〇八年になった。ワードラウィーという女性がある男の夢を見た。目が目覚めたら、それは長政のようであった。それまでに歴史に興味を持っていなかった彼女はアユッタヤーの歴史を調べはじめ、アユッタヤーへ兄を誘い、遊びに行った。アユッタヤーの雰囲気は昔から馴染のある感じがした。それから彼女は仕事で日本人男性の山田と知り合い、四年の交際を経て結婚した。結婚式の場で山田は突然タイ伝統衣装を着ているワードラウィーに「僕はワードを四百年も待っていた」と囁いた。

3．3　両作品の作風

長政は歴史上の人物なので、文学作品として彼の人生を描いている『王国への道』と『オークヤー』を一見すると、歴史小説の印象を受ける傾向にあるが、確かな史料が乏しいことと、それぞれの著者の捉え方によって、書かれた内容は確実に考証的に裏付けられる歴史小説より、空想から生まれたものが顕著に見られる。周作は「以上のような三つの理由の主題をストーリーにおりこみつつ書いたこの作品はさらに手を加えた上で上梓したいと思っている」とはっきり語った[遠藤:1981:154]。同様にコーンクナーリーも執筆に必要な資料を集めた後、日タイ両国の季節や地理など、「小説の色を入れる」という過程に取り組んだ（Konkunari:ブログ）。粗筋から分かるように歴史の肝心なところは収まっているが、実際にあったことかどうか分からない、つまり作家の想像で作られた部分が多い。長政は江戸を出て海外に渡航することが両作品の本筋の始まりであり、話が進んでいくと、詳細な部分で徐々に異なってくる。それに関しては次の大きな二点をまとめることができる。

まず、長政の周りの登場人物と日本からの経路である。構造主義的な見方もできるように周作は意図的にペドロ岐部を登場させ、長政と岐部を対比しながら、目的達成をさせたい日本人なりの生き方を表現した。二人は共にマカオに渡ったが、それぞれの目的を追求するため、長政はアユッタヤー、岐部はローマへ渡った。周作が強調したいのは、二人の人生の目標地点は違うが、熱心、粘り強さ、そして長政の場合、腹黒さを頼りに成功したところだと考えられる。一方、コーンクナーリーはそのような人物を登場させず、長政と共にアユッタヤーに渡る単に二人の友人、ノリミツとマサヒロだけを登場させた。アユッタヤーまで到着する途中の事情についても記述がなく、またマカオではなく、ただ「台湾を経て」[Konkunari:56]としか書かなかった。恋愛相手に関しても両作者は違う人物を登場させた。周作はヨターティップ王女をソンタム王の娘とし、また長政の恋愛対象にした。しかし、ヨターティップの名は[14]、実際にソンタム王の娘であることを裏付ける史料がなく、同じ名前を持つ人物はアユッタヤー王朝の第二十七国王・ナーラーイ王の妹にもある。もう一人の女性は、長政と対立してから、ソンタム王に次ぐ新王に殺害された日本人の傭兵を指揮している城井久衛門の娘、ふきである。長政は結局、生き残ろうとするヨターティップ王女に騙され、亡き父と自殺した母のため、復讐を求めるふきに毒を飲まされ死んだ。コーンクナーリーはそれに対して、長政はソンタム王の意思によりカンラヤーニー王女と結婚し、依然としてワードとの恋愛は実現できなかった。

次に、社会的な文脈である。周作もコーンクナーリーも異文化に接触している長政を描出しているが、コーンクナーリーの記述の方が際立っている。両作者は彼のカルチャーショックのことも描いている。社会文化において周作はほぼ最初のみ触れ、何カ所か言及しているシャムの暑さ以外、日本人の典型的な苦手な食べ物に対して否定的な印象を書いている。それは、藤蔵がアユッタヤーに渡ったばかりの頃、食べ物に困ったような様子で分かる。食べ物に対する強い拒否反応は二回現れている。一回目でパクチーとははっきり書かれていないが、想像できる。周作は、「アユタヤの人間はどんな食物にも香料に臭気の強い草を入れる。その草の臭気は腐蝕した鉄の臭いのようで、日本人たちは、「死臭のようだ」と嫌がって避けた。」[遠藤:1984:58]と語った。もう一つは、ドリアンと思われる果物を食べた途端、「臭え」と藤蔵は悲鳴に近い声をあげてから、「肥溜めのような臭いがしますね」[遠藤:1984:60]と言いつづけたことである。

作者がシャムの習慣を誤解している部分も現れる。それは、日本人の仲間がアユッタヤーに来たばかりの藤蔵に、「このまちでは僧は殊更に敬われている。僧に朝夕の食事を与えることは貧者も怠らぬ」と言ったことと、ヨターティップ内親王が今オークヤー・セーナーピムックになった長政に会話をしてくれないと言う設定で、周作は「仏教の戒律のせいでアユタヤ王宮では男女区別は厳格であり、身分が低いこちらから話しかけるなど到底許されない。」[遠藤:1984:162]という説明である。事実としてシャムの僧侶は基本的に午後は食事しないことと王宮での男女区別は確かだが、それはタイの仏教の戒律ではないことである。

全体的に見れば、周作は社会的な様子より、長政の敵国との戦い方と政治的な行動、特にライバルであるオークヤー・カラーホームとの敵対をストーリーの主題としており、物語の雰囲気はスリラーに近い雰囲気があふれている。

一方、コーンクナーリーは物語の最初から最後まで、日タイの社会・文化的な要素を描いている。長政の幼いころを描出しているプロローグから最初の三章まで、おはじきや下駄隠しのような日本の庶民文化から、江戸時代の参勤交代や士農工商の社会階級や朱印船など社会・経済状況まで描いている。アユッタヤーが舞台になった部分も、本格的に当時の社会の様子を描き出している。日タイの文化を比較する場面も多く見られる。具体例を挙げると、長政がタイ米を見た時と江戸に行き将軍と会った時である。

長政は「シャムの人々は日本人と同様にご飯を食べることだ。ここのご飯は細長いんだ。短く太い粒になっている日本米と違う。」[Konkunari:65]と知見を述べる場面がある。似たような感想は小説の後半でも見られる。長政がシャムから江戸へ行った時、アユッタヤーと日本の豊かさとの比較を将軍にこう報告した。

「違うところでございますが、向こうではどんな者でも皆十分にご飯を食べられます。」

「そうですか」将軍は興味を持ち頷いた。

「我々のと違います。食べられたり食べられなかったりしますね。」

[Konkunari:177]

この二つの例以外でも、シャム人のビン老樹を噛むことと日本のお歯黒、アユッタヤーに住んでいる日本人は銭湯をつくり日本にいるようなお風呂に入ること、江戸幕府の鎖国など、両国の習慣を相当紹介している。また感情あふれる場面になると、コーンクナーリーは散文から脱し、突然詩を挿入してくる[Konkunari:96-97]。これはタイの文豪の一人、女性作家トンマヤンティーがよく使うテクニックである。物語の終盤に差し掛かるとタイ人が好む転生の話を導入し、現代を舞台にワードと長政を再登場させ、今回はワードラウィーと山田となる日本人になり、二人の恋愛が叶うという結末である。

両作品を考察すると、周作による長政の個人的、ないし政治的な行動を強調かつ目立たせる描写に対し、コーンクナーリーは両国の架け橋になる長政を通じて比較社会・文化への心構えを固め、そして恋愛話を描写したのであろう。

4. 異国における長政の正体

人が異文化に入り込む際、溶け込むことができる部分もあれば、そうでない部分もある。周作とコーンクナーリーは、程度が違うかもしれないが、その適応性を意識し、作風に現れるように、様々な場面で長政の文化に対する観察力と順応性を表した。また新たな習慣を身につけながら、自らの色合いをよりはっきり感じることもある。それは違うものに触れるからこそ、自分のアイデンティティーを実感することである。第四章では、両作者により長政はどのように自分のアイデンティティーを維持しながら、正体を見せてくれるのかということを追求したい。特に、長政がアユッタヤーに渡る動機と日本人として活躍するというのが焦点になる。

周作の長政は野心家の冒険者であり、海外で日本人の強みと思われる戦力を生かして成功した。まず日本を出る前に、アユッタヤーの名前さえ聞いたことがない。初めてアユッタヤーの情報を耳にしたのはマカオで外国と貿易している老人と会話した時である。アユッタヤーで傭兵をしている日本人がいることにも驚いた。周作はこのように書いた。

「戦さに？」

藤蔵は驚いた声をだした。日本人が異国で戦さを行っているとは夢にも知らなかったからである。その子供っぽい驚きぶりが可笑しかったとみえて、老人は目を細め、

「アユタヤでは戦さの折、日本人を使う。日本人は戦いぶりが巧みだと皆、知っている」と説明した[遠藤:1984:39]。

藤蔵は、アユッタヤーはよいところだが、危険な地だというような注意を受けたが、野心のある彼は岐部と話す際、アユッタヤーへ行く目的をこのように率直に言った。

「お前の嫌いな金儲けよ。いや金儲けだけではない。そのアユタヤの王は日本人を雇って戦さの手助けをさせていると聞いた。日本では俺のような身分のひくい男には望めぬことが、ど

うやらあの国ではできそう。だから出かける気になった。」（遠藤 :1984:43）

周作は明晰な藤蔵のイメージを描いた。藤蔵は日本の戦争史についての知識を持ち、適切に利用した。例えば、ビルマ軍と戦う時、敵は象と鉄砲で攻撃するので、象を驚かせるため、爆竹を使うことを提案した。なぜそのようなことまで分かるのと聞かれると、藤蔵は、「実は日本におります時、平家琵琶にて富士川の合戦のくだりを聴いたことがございます。鳥の羽音に驚いて平家の大軍が算をして逃げだした――」[遠藤 :1984:78-81] と答えた。他にも、政治的な権力闘争に巻き込まれている長政は、摂政のことが気になり、身の安全のことを考える際、信長と秀吉のことを思い出した。

彼は日本の織田信長のことを思った。信長公が父以来の老臣を役に立たぬと言って昔の忠勤ぶりさえ問題にせず、亡き者にした話を思い出したのである。[中略] だから秀吉公はいつも信長の前で役にたつ男だということを示した。[遠藤 :1984:146-147]

このような教訓で長政は「危険な」アユッタヤーで長く生き残った。その反面、自分の関与により日本人の傭兵を指揮している城井久衛門の死につながったことは、自分の利益のためとはいえ、複雑な気持ちになった。裏切り者という行動で反省することもあるが、出世するためには、倫理を乗り越えなければならないと思った。そういう意味で、周作は長政の汚れた部分を見せてくれた。終盤になると、長政はオークヤー・カラーホームの策略に陥り、最終的に城井久衛門の娘、ふきに殺されたが、周作の目から見ると、結論としてそれは「壮烈なる死、男の死」である [遠藤 :1984:339]。

一方、コーンクナーリーが描く長政は、日本にいた時からアユッタヤーのことを知っていたが、日本を出る勇気がまだなかった。結局、出国の大きな動機は絶望と考えられる。作者は、「大久保様が他界したし。長政と菊との愛も叶わなくなったし。長政と二人の親友、ノリミツとマサヒロは決心した。彼らはシャムに向かう。」[Konkunari:54] と書いた。長政の気質に関しては、そもそも友好的な雰囲気があふれる男であり、「いつもにこにこしているような顔立ちをお持ちの長政は、どんな表情でも見せてくれない。そのような半分微笑んでいるのは彼なりの特徴です。彼は日本人の輪の中にいる時でも常に落ち着いて無口です。」[Konkunari:71] ということである。このような人物は溺れているシャムの御嬢さんを見た時、すぐに飛び込み、救出しようとした。その行動はシャム人に、「お兄さん、とってもいい人ね。助けてくれなかったら、我々のワードお嬢様は大変だわ。本当にありがとうね。」[Konkunari:66] と絶賛された。優しい紳士的な様子はコーンクナーリーの長政である。

周作の長政に対し、コーンクナーリーの長政の大きな特徴は、英雄的な戦いに強い人物より、好奇心を持ちながら、紳士の精神で異文化に適応する、かつ学ぶ日本人である。コーンクナーリーは、アユッタヤーに初めて行き異文化に接触する長政は理解できない習慣や文化があるだろうというのを前提とし、その具体例をいくつか描いている。例えば、ある日の朝、長政

と友人が、アユッタヤーの市民が托鉢しているシャムの僧侶に対し、供え物を与えている様子を見て不思議に思った。その異文化に驚いた日本人を見ていたタイ人・ファードは「サイバート、それは（タイ語で）サイバートと言うの」と説明してあげた [Konkunari:62]。

それだけでなく、この男は異文化コミュニケーションを志す日本人でもある。タイ語を学び、日本語も教え、時間があったら、アユッタヤーを回り、お祭りにも行き、様々な場面で現地の文化と言葉を習った [Konkunari:62-64, 81]。長政は、タイ語の四字熟語「ナイナーム・ミー・プラー、ナイ・ナー・ミー・カーオ」（川の中に魚がおり、田んぼの中に米がある）があるようにシャムの豊かさに魅了された。国際的な雰囲気に慣れつつある長政は、最初から傭兵を目指すのではなく、貿易に熱心であった。貿易で成功を収めた長政は頭領に誘われ、世話になったシャムのために傭兵としても貢献することに決めた。努力が認められ、国王からいただく恩賞として王女と結婚した。恋愛対象でない、断ることのできない結婚であった。シャムに深く馴染んだ長政はリゴールの藩主になり人情を見せてくれた。

5. 結び

日本人作家・遠藤周作とタイ人の女性作家・コーンクナーリーはそれぞれ歴史的史料が乏しい中で、江戸時代の初期にシャムのアユッタヤーに渡来した山田長政を中心に、自らの解釈と捉え方により中編の歴史小説『王国への道――山田長政』と『オークヤー』を著わした。出身国が違う両作家は、限られている情報を生かしながら、自分なりに価値観と推測を導入している。その結果、この二作で目立っている相違は、周作は長政の現地の政治への絡み合いや掛け引き、宮廷内の王位継承をめぐる権力闘争により殺害されることなど政治生活を多く描いたのに対し、コーンクナーリーは政治よりも、長政の社会的な適応や異文化に溶け込み具合やシャムの王に対する人情を強調していることである。

物語の構造やより細かく内容を見ると、当然違う様子が見られる。周作は、日本史上に実在したペドロ岐部を登場させ、つまり、もう一人の登場人物を長政と対比させた。二人の価値観と人生の目標の違いが指摘されながら話が進んでいく。周作は、意図的に構造主義に沿い、この作品を創作したと言っても過言ではない。また周作は、長政が日本の戦争史を熟知しておりアユッタヤーでそれを生かし、能力を発揮した賢い日本人であるが、根本的に心のよい人間ながらも野心があるため、利益を得、かつ成功するまでしたたかな行動も取ったりするイメージも描いた。長政は最終的に成功したが、以前自分も関与していた事件によって殺された。

一方、日本史を知っているタイ人のコーンクナーリーは伝記小説なりに一直線で長政の人生を描いた。また特に描き出されたのは、日本の歴史社会、タイの習慣、そして比較的に史料が多く残っているアユッタヤーに住んでいた日本人に関する全体の生活である。当初と途中で物語を面白くするため、恋愛話も導入した。さらにその愛は長政が生きているうちに叶わなかったが、長政は死んでも愛は死なないと、作者はそれを示す

ため、タイ人の今まで抱いている信仰でもあり好んでいる輪廻転生を利用し、現世の長政を再び登場させ、タイ人の女性への恋愛を成功させた。それに周作と違い、コーンクナーリーは、政治的にしたたかな面のある長政は控え、人柄がよく優しく尊敬できる日本人の男の一人であると見ている。全体に見て、周作の長政は冒険者で成功を収めた政治家であるが、コーンクナーリーの長政は異文化の学習者で人情のある紳士である。

参考文献

日本語

井上絵里「遠藤周作における歴史小説創作の意味――王国への道山田長政」『九大日文』十号、二〇〇七年十月、三八―五一頁

植田紳爾「メナムに赤い花が散る」『宝塚歌劇脚本と配役：花組十一月公演』一九六八年一〇月、一八―四二頁

植田紳爾「メナムに赤い花が散る」『宝塚歌劇脚本と配役：三月花組公演』一九六九年三月、一八―三七頁

遠藤周作（一九八四）『王国への道――山田長政――』一四版、東京：新潮文庫

遠藤周作「王国への道――山田長政――」『太陽』（一九七九年七月～一九八一年二月）

遠藤周作「山田長政がなぜ私の興味をひいたか」『太陽』三月号一九八一年、一五一―一五四頁

遠藤周作（一九七三）『メナム河の日本人』戯曲、東京：新潮社

『学習図鑑：日本の歴史』（一九九五年）東京：講談社

大津透・久留島紀子・藤田覚・伊藤之雄（二〇〇七）『新日本史：日本史B』改訂版、東京：山川出版社

詳説日本史図録編集委員会（編）（二〇〇九）『詳説日本史図録』二版、東京：山川出版社

チャーンウィット・カセートシリ（二〇〇八）『アヤタヤ』（吉川利治訳）改訂版第一刷、Samutprakarn: タイトヨタ財団

智原五郎八『暹羅国風土軍記』『暹羅国山田氏興亡記』（『海表叢書　巻五』更正閣書店京都、一九二八年に収録）

『天竺徳兵衛物語』（校訂漂流奇談全集』博文館、一九一一年に収録）

土屋了子「山田長政のイメージと日台関係」『アジア太平洋討究』五号、二〇〇三年三月、九七―一二ページ

東智尚（二〇一三）（『海外雄飛の夢を紡ぐ――山田長間背少年時代』東京：文芸社

中津文彦（二〇〇〇）『山田長政密書』東京：学陽書房

『微笑みが心をつなぐ愛のかけ橋：日タイ修好一二〇周年』(เรื่องรักแห่งใจ ของ ไทย-ญี่ปุ่น)（二〇〇七年のブックレット）東京：タイ王国大使館

『山田仁左衛門渡唐録』（『校訂漂流奇談全集』博文館、一九一一年に収録）

和久峻三（一九八七）『山田長政の秘宝――シャム日本人町の超人』東京：角川書店

外国語

Baker, C., Pombejra, D. N., Van Der Kraan, A., Wyatt, D. K. (2005). *Van Vliet's Siam*. Chiang Mai: Silkworm Books.

Chanthonsakul, W. (วันเฉลิม จันทรสกุล) (2003). *Yamada Nagamasa: Khunnangsamurai haeng Krungsi Ayutthaya* (ยามาดะ นางามัสสะ: ขุนนางซามูไรแห่งกรุงศรีอยุธยา). Bangkok: Malai.

Culler, J. (1997). *Literary Theory: A Very Short Introduction.* Oxford: Oxford University Press.

Dhiravegin, L. (ลิขิต ธีรเวคิน) (2003). *Wiwatthanakan Kanmueang Kanpokkhrong Thai* (วิวัฒนาการการเมืองการปกครองไทย). Bangkok: Thammasat University Press.

Dominguez, C., Saussy, H., Villanueva, D. (2015). *Introducing Comparative Literature: New Trends and Applications.* New York: Routledge.

Endo, S. (2006). *Sudaen Siam: Yamada Nagamasa* (สู่แดนสยาม: ยามาดะ นางามาสะ).
Banchongmanee, B. (บุษบา บรรจงมณี) trans. Bangkok: Nation Books.

Konkunari (กรกุณารี). (2006). *Ok-ya* (ออกญา). Bangkok: Na Banwan - nakam.

Kuekdet Kantamara (คึกเดช กันตามระ). *Chao Lai : Nawaniyai Ingprawattisat* (เจ้าไล: นวนิยายอิงประวัติศาสตร์). Bangkok: Chulalongkorn University Press.

Ryan, M. (2012). *An Introduction to Criticism: Literature/ Film/ Culture.* West Sussex: Wiley-Blackwell.

Soisattaban (สร้อยสัตตบรรณ) (2008). *Komnathia* (ก้มหน้าเที่ยว). Bankok: Nanmeebooks Teen.

Soisattaban (สร้อยสัตตบรรณ) (2007). Plengchiwit (เพลงชีวิต 2505). in *Somphan Radap 8* (สมภารระดับ ๘). Bangkok: Praew Samnak - phim.

Thawornwatskul, M. (มานพ ถาวรวัฒน์สกุล) (1993). *Khunnang Ayutthaya* (ขุนนางอยุธยา). Bangkok: Thammasat University Press.

Thitinatda (ธิตินัดดา). (1991). *Suriya Phayong: Ok-ya Senaphimuk* (สุริยาผยอง: ออกญาเสนาภิมุข). Bangkok: Tua-akson.

Wyatt, D. K. (2003). *Thailand: A Short History.* Chiang Mai: Silkworm Books.

ウェブサイト

Konkunari. http://www.bloggang.com/viewblog.php?id=yui&group=5&page=13. ブログ・アクセス二〇一五年九月二二〇日・

註

1　This paper was originally written in Japanese. The summary in Thai and English is available upon request at keithkosit0213@tufs.ac.jp (Kosit Tiptiempong).

2　官位の「オークヤー」はアユッタヤー王朝において使われていた。元々クメール語由来の語と推測されている。

3　日本語では、タイの地名及び古都・王朝である「**อยุธยา**」（県が用いる正式な英語の表記で、「Ayutthaya」）を通称として「アユタヤ」と表記しているが、タイ語の綴りと語源から見ると、「ユ」は促音になり、「ヤ」は長音になる。英語の一般的な表記にも表れるように、「th」の前に「t」があり、読む際、「yut」は促音になる。またタイ人自身も実際に「**อยุธยา**」（Ayutthaya）をタイ発音する際、その促音を言う。日本語の表記としてタイ語に最も近

いのは「アユッタヤー」になる。タイ語の古都アユッタヤーは、実際にインドにある古都の名前でもあり、ラーマーヤナに登場するラーマ王子の故郷でも知られているアヨーディヤー（英：Ayodhya）にちなんで名づけられ、無敵を意味する。本稿では本のタイトルと引用以外、「อยุธยา」（Ayutthaya）のことを「アユッタヤー」と表記する。

4　この三書以外、江戸時代には山田長政伝説が多数あった。その中で後に大きな影響与える書籍は、一七九四年に現出した、著者不明『山田仁左衛門渡唐録』である［土屋：99］。

5　公文書『チョットマーイヘート・ワン・ワリット』は、最初に英語版の『The Historical Account of the War of Succession Following the Death of King Pra Interajasia, 22nd King of Ayuthian Dynasty』からタイ語に翻訳されたが、誤りがあるようである。二〇〇五年に、クリス・ベーカーらが新たにオランダ語から英語に翻訳し、『Van Vliet's Siam』のタイトルで刊行された。

6　山田長政についての小説は、本稿が本題にする遠藤周作の『王国への道―山田長政』（一九八四）以外でも他にあり、例えば、『山田長政の秘宝――シャム日本人町の超人』（一九八七）や『山田長政の密書』（二〇〇〇）や『海外雄飛の夢を紡ぐ――山田長政少年時代』（二〇一三）などがある。

7　春日野八千代が山田長政の役を演じる宝塚歌劇団の『メナムに赤い花が散る』は一九六八年と一九六九年に公演された。

8　アクション映画『サームーライ・アヨータヤー』（アユッタヤーの侍）は二〇一〇年一二月に公開された。タイで活躍している日本人の俳優・モデル、大関正義が山田長政の役を演じる。映画の設定はナレースワン王の時代（在位：一五〇九―一六〇五）に、長政はすでにアユッタヤーにいたことから、かなり歴史から離れているという指摘もあった。ちなみにこの映画が公開された時期は、タイの広範囲で大洪水が起きた時期と重なったため、興行収益は上がらなかった。

9　ブッサバー・バンチョンマニーのタイ語訳が二〇〇六年に刊行された。

10　何代目の国王になるのかはタイの歴史に対する見方によって変わる。アユッタヤー王朝の初期に、ラーメスアン王が二度在位（一三六九年―一三七〇年、一三八八年―一三九五年）したことと、一五〇〇年半ばごろ、旧王の妃でもあり次の王の母親でもあるシースダーチャンと組み、王位を奪ったウォーラウォンサーティラート王がいたが、タイの歴史学者によっては「裏切り者」と見なされ国王として認められないことから、ソンタム王の順番は見方によって違ってくる。

11　ラッタナコーシン王朝（バンコク）になり、タイの王室典範が一九二四年に初めて制定された。

12　チャンウィット氏は史料に基づき、次の通りアユッタヤーにあった日本人町の頭領の名前をまとめた。オークプラ純廣（一六〇九―一六一二）、城井久右衛門（一六一六―一六二〇）、山田長政（一六二〇―一六三〇）、糸屋太右衛門と寺松広助（一六三三―一六四二）、木村半左衛門とアントニイ・善右衛門（一六四二―？）［チャーンウィット：156］。

13　遠藤周作ははじめてバンコクへ行ったのは昭和四十年代のはじめであり、その際アユッタヤーの近郊にある日本人町跡にも訪れた。

14　実在していたシースパン内新王殿下・クロンマルアーン・ヨーターティップは、一六三六年に生まれ、一七〇六年に没した。